ぎたえん☆　「一期一会と彼女」

いずか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぎたえん☆　「一期一会と彼女」

【Ｎコード】
Ｎ１７７２Ｌ

【作者名】
いずか

【あらすじ】
高校２年の冬
寒空の下、忘れものを取りに戻った教室にきみがいた
ただのクラスメイト
目立たない人だと思ってた
でも、どうしてだろ？
あれからずっとわたし
きみのこと考えてる……

ＥＰ０１．「ギターとえんぴつ」

あの時、彼は言った。

「好きなんだ。付き合ってくれない？」

でも、今目の前の彼はこう言う。

「他に好きな奴ができた。別れてくれないか？」

結局はそうなんだ。

あたしは、彼の気まぐれに遊ばれたんだ。

きっと今もどこかで……

「おはよ、愛美」

背中に届いたクールな口調、女の子の肩をこんなに強く叩くのは彼女しかいない。

「おはよぅ、涼」

彼女は、三上涼子。

朝からでも涼は、相変わらずクール、なんにだってまず動じない。

その時の空気とノリで生きているわたしとは正反対で、なにかと頼れるし、頼りになる。

わたしは、開いていた文庫本を机に置くと後ろに座った涼に向き直った。

朝のホームルーム前の教室はわたし達を含めて数人しかいない。

ほとんど男子がいないせいか、なんだか解放感がある。

今だったら、わたしが抱える秘密を全て叫ぶことができそうな気がした。

「愛美、何読んでんの？」

置いた本を涼が指す。

――あ、本が閉じちゃってる……

「えっとね、”ギターと鉛筆”ってゆうの。高校生二人が織りなす激しい恋愛劇を緩く描いてるんだって」

本屋さんで読んだ宣伝広告をそのまま言った。

涼は、女の子にしては短い髪をさらりと左手で掻きあげると首をかしげた。

「はぁ？そんなの面白いの？」

見失った読みかけのページを探しながら答える。

「それが面白いんだって。クライマックスなんて凄いんだよ」
得意げに言ったわたしを見つめ、かしげていた首をコクリと落とした涼は綺麗な瞳を細くした。
「どうせ振られた女が腹いせに男のギターを鉛筆で弾いちゃうんでしょ？」
……え？
「そうなのぉ！？」
涼は目を限界まで広げてから笑った。

午前の授業が終わり、待ち望んだお昼休み。
高校生って何をしてもお腹が減る。
ううん、何もしなくても減るのかも……
涼とクラスの女の子達と机を合わせてお弁当を広げる。
その他の子達は、他のクラスや彼氏の待つ特別教室へ消えていった。
「あぁーあたしも彼氏欲しいなぁー」

お箸でつまんだ赤いウインナーを口へ入れると由美ちゃんが言った。
愛らしい横顔にくるくる巻かれた栗色の髪。
校則ぎりぎりのスカートに細い手足。
あとほんの少し身長が高かったら、きっとモデルになれたはずの美少女は、横目でおばか騒ぎする男子達を見てため息をついた。
「またまた、ゆったんそんな事言って。張り飛ばすぞぉ」
そう言ってコッペパンの袋を開けた綾は白い歯を覗かせて笑った。
「綾、今日もコッペパンなの？」
由美ちゃんは卵焼きにお箸をつけながら大きな目をさらに大きくする。
「あったりまえでしょ！朝昼晩、全部ラーメンだと太るわっ」
そう、綾の家はラーメン屋さんでわたしも涼と何回か行ったことがある。
看板メニューは”とんこつ味噌ラーメン”でかなりおいしかった。
帰り道、あれを毎日食べたいと言ったわたしは、今の由美ちゃんと同じような顔を涼にされた。
「でもさ、綾のコッペ好きはやばいよ。中身が違うっても外は同じパンだぞ？家でも麺ばっかなんだろ？日本人なら米を食え、米を」

男前の女の子、涼は毎日幕の内弁当だ。
白いご飯をとてもおいしそうに食べる。
「さすが涼さま。素敵ですっ」
由美ちゃんの一言にみんな頷いた。
と、一人あくびをしながら頬杖をついていたわたしに気付いたのか、
綾が牛乳でコッペパンを飲みこむと言った。
「あれ、そうえば愛美、弁当は？」
涼の顔がにやけている。
「さっきの休み時間、体育の後に食べちゃった・・・」
騒ぐ男子より、みんな笑った。

ＥＰ０２．「事件」

「愛美、一緒帰ろっ」

軽そうなバックをぶら下げ、涼が言った。

帰りのホームルームで配られた大量のプリントをのろのろと整理していたわたしを涼は、のろまと笑う。

昇降口の白い壁に寄り掛かってわたしを待つ涼は、なかなか様になる。

まるでスクール映画のワンシーンをそのまま切り抜いたような光景。

永遠を思わせる夕焼けの中、いつかは薄れてゆく初々しさと幼さを惜しむような気分になった。

「なぁに辛気臭い顔してんのさ？」

……えっ、顔に出てた？

苦笑いを浮かべ、歩きだす。

「愛美が何考えてるか、あててみようか？」

「えぇ……」

涼の言うことはやたらと当たるから恐ろしい。

小学校からずっと同じとゆう理由では、きっと片づけられない”なにか”があるのだ。

そうお母さんのような……とは少し違うか。

「高2になってもまったく彼氏ができない。あぁわたしってそんなにモテないのかしら……とでも思ってんじゃないの？」

うっ、これだから……

「はい……そうです。自分、焦ってます……」

勝ち誇ったような笑みを浮かべる涼はわたしの肩に手を乗せた。

なかなかの身長さに恨めしさが募る。

「でも急にどうしたんだ？前は、彼氏なんてわたしには必要ない！！って言いきってたんじゃん？」

いつのことだかわからなくて、少し考える。

結局わからなくてとりあえず笑顔を返した。

―覚えてないわけ？

とでも言いたそうに涼は吹いた。

「だってさ、こんな季節に……恋人のいないクリスマスなんてありえないよっ」

「あんたには去年も、その前もずっと恋人なんていなかったけど？」

……うぅっ、それを言われては何も言えない。

分が悪い話を変えよう。

「そうゆう涼だって、中３の夏からいないじゃん！」

涼の口元が三角形に引きつるのがわかった。

こりゃ攻め時だ。

「それに涼には、ぞっこんのかずくんいるしぃー」

かずくん。

わたし達が中学二年だった頃、　突然、わたし達の部活に入部してきた一年生がいた。

それが、かずくん。

彼は全校集会でたまたま見かけた涼に惚れたのをきっかけに高校生になった今でもわたし達の後輩なのだ。

「あいつは関係ない」

風に吹かれるクールビューティーな横顔を振りまくと、涼はわたし

にでこピンを見舞った。

けっこうな衝撃と痛みにしわを寄せる。

「鉄拳制裁。余計なこというなっ」

すたすた進んでゆく涼を前に、案外彼女も子供だなと微笑んだ。

事件が起きた。

いつもバックの一番手前のポケットに入れた定期が無い。

「愛美、もう一回バックの中見てみなよ」

慌てるわたしを傍に、やっぱり冷静に落ち着きはらった涼は普段と同じ口調で言った。

「もう三回は見たよ。制服のポケットにも無いの……」

頬が照って熱い。

頭の中で必死に記憶の引出しを引き抜いて、今日一日の中から定期を探す。

「愛美、朝はあったの？」

「うん、だって朝も電車で来たし……」

細い指を頬に突き立てて、涼は唸った。

「なら、学校かもよ？教室とかロッカーとか」

「ロッカー……あ、そうえば体育の後お弁当出すのにバック開けた！」

涼は優しく笑うと両手を差し出した。

行って来い、とゆうことか。

肩にぶら下げたバックを涼に投げ渡すと振り向いた後に声を張りたてた。

「すぐ行ってくるから、待っててよね！」

涼が返事をしたのかわからなかったけれど、わたしは１１月の冷たい風を切って走り出した。

EP03.「シルエット」

息を切らして校門の前に着いた時、あたりはもうじわじわと闇に染まりつつあった。

グランドで練習に励む生徒も見えない。

県立高校にしては真新しく大きな校舎からいくつかオレンジ色の光がこぼれてる。

校門から見えるA棟は、だいたいが教室で占める。

一年生の教室が並ぶ四階に明かりは無い。

三階の一番端から二番目、２－２の教室に明かりがある事に驚いた。

「まだ、だれかいるのかな？」

こうゆう時、わたしは一人ごとを言いやすい。

静かに、ゆっくり階段を昇る。

音の無い一、二階を過ぎる。

ひんやりと冷たいアルミ製の手すりが手にへばり付きそうで怖い。

すぐにそれが自分の手汗が引き起こしているんだとわかる。

……夜の学校は、どうも苦手。

細い光が半分閉じられたドアからこぼれてる。

ゆっくりと動く人影が見えた。

高く、細いシルエット。

女の子にしては大きすぎるし、こんな遅くまでたった一人で残っているとも思えない。

「クラスの男の子かな？」

胸の鼓動が高まる、緊張してるのかな？

わたしはそっとドアを開けた。

ＥＰ０４．「笑うとこ」

秋も終りが近づき、赤く燃えるような紅葉が風に舞う。

近くの山で焚かれた白い煙が乾いた空気と混ざりあい、鼻をつく臭いを冷たい夜風が運ぶ。

放課後の教室で、相変わらず僕は鉛筆片手に楽譜を記す。

先の丸くなった鉛筆と散らばった楽譜でもう長い事ここにいるのがわかった。

連なった窓から覗く景色は、墨で塗りつぶしたように鮮明さは無く、反射する僕の少し伸びた顔を映しだした。

経験した事のない失恋を綴った詩が自分でも笑える。

頭上一列だけ点けた蛍光灯に書きあげた楽譜を透かしてみた。

空想だらけの恋物語が見えるような気がしたんだ。

「なぁにしてるの？」

瞬間的に条件反射した僕は、半分だけ尻を乗せていた椅子から勢いよく落ちた。

少し間が空いてクスクスと笑い声が聞こえる。

「えっ？」

頬に流れた綺麗な髪を耳にかけ、うずくまった僕に目線を合わせる。

大きな瞳に柔らかな小円を描いた輪郭。

化粧気の無い、まだ幼さすら残る顔が僕の鼻数センチ先にある。

「圏崎くん、こんな時間まで何してたの？」

光のようにキラキラの瞳が弾けた。

「あ、いや。別に何も……」

恥ずかしさに耐えきれなくなって視線を反らす。

散らばった楽譜と詩を書いたノートが目に入った。

……マズイ

僕の視線に気づいたように彼女はそれに手を伸ばした。

ひらひらと舞うノートに手を伸ばした時にはもう遅かった。

「へぇ、圏崎くんて詩人なんだねぇ」

……詩人？やめてくれ、恥ずかしい。

突然の事に頭が上手く機能しないのか、僕はゆっくりノートを彼女

から奪った。

「ちょ、見ちゃダメだって……」

口調と声トーンが上手く噛み合ってない。

完全に上ずった声でとりあえず発声する。

「ごめんね。そんなつもりじゃなかったの」

そんな声がマズかったのか、すまなそうにしょげた彼女に訳のわからない罪悪感を抱く。

……何か言わねば

「ごめん、言い過ぎたよ。たかがノートだ、うん。存分に見て」

……なにを言ってるんだ僕は？

賞状のように差し出したノートに彼女はそっと手を伸ばした。

「へぇ……夕焼けの約束覚えていますか？君が……」

「いや、読んじゃダメだって」

子供のように無邪気に笑うと川下さんはノートを僕へ寄こした。

ふわりと柔らかい香りが鼻先を撫でる。

それにやられてノートも柔らかくなってしまうんじゃないかと本気

で心配した。

「そうえば、なんでここに？」

どうも恥ずかしくて名前を呼べない。

わたし？

と指を自分に向ける彼女に返事した。

「定期落としちゃってね、探してるの」

……定期？

まさかこの楽譜の山に埋もれてしまったのだろうか？

僕は慌てて楽譜の山を掻き分け始めた。

「どっ、どうしたの？」

びっくりしたのか川下さんはさらに瞳を大きくした。

無いや、と顔をあげたすぐ先に彼女の綺麗な瞳があった。

潤った世界に僕が映っているのが見えた。

ぱちぱちと瞬きの動きで我に返る。

「なにか、わたしの顔に着いてる？」

子供が母親に問うように可愛らしい言い方。
ぽかんと開いた口元がなんとも無防備に感じて、今この教室に二人だけだとゆうことに今更気付いた。
慌てて距離を開いた僕にまた驚いたのか、綺麗な瞳が揺れて優しい笑みがこぼれる。
「大丈夫、園崎くんを食べたりしないよ？」
……えっ？
……じょ、冗談なのか？
だとしたら、ここは笑うべきなのか？
口をパクパクさせる僕を横目に、彼女は散らばった楽譜をトントン揃えると僕に差し出した。
冷えたせいのか赤くなった唇から並びの良い歯を覗かせ笑う。
僕が受け取ると彼女はスタスタと自分の席へ向かい、がさごそと定期を探し始めた。
時々唸る仕草から、どうやら見つからないらしい。
引いた椅子を戻すと僕の方に向き返って、首をかしげた。
「ないの？」

「ないの」

「僕も探すの手伝うよ」

本当に？ありがとうっ！

と返ってくると思っていた僕は、次の彼女の言葉に拍子抜けした。

「痛っ、ささくれ剥いちゃった……」

……え？

ここは、笑うべきなのか？

EP05.「ひみつ」

「もういいよ園崎くん。ありがとう」

もうあれこれ三十分近くは探してる。

机、ロッカー、ごみ箱、掃除道具入れ、目に入るもの全てに手をつけた。

無いものは無いの。

男も諦めが肝心よ。

いつだか由美ちゃんが言ってた。

「でも、定期が無いと困るでしょ？」

「うぅん」

確かに困る、とは言えなかった。

園崎くんは埃まみれになりながら一生懸命に探してくれる。

でも、なんでたいして話をしたことも無いわたしにこんなにまでしてくれるんだろう？

きっと園崎くんは、困った人を救うヒーローなんだ。

……でも、もし定期が見つかったら捜索料とか言ってお金を取るのかもしれない。
でも、この人に限ってそれは……

「あっ！」

本棚の裏を覗いてた園崎くんが急に大声を上げるものだから、心臓が飛び出でそうになった。

「あ、あった？」

期待を込めると同時に、これでなかったらお礼を言って帰ろうと思った。

「……誰だよ、こんなとこに置いたの」

なにを？

こんなに大きな本棚の裏に置くらいだから、よっぽど秘密にしておきたいものなのかな？

「園崎くん、なにがあったの？」

「……見る？」

園崎くんの言い方が悪いのか、わたしの想像力のせいなのか、いろいろな悪いものを想像してしまう……

「よいしょ」

その埃まみれのモコモコの毛から最初は大きな虫かと思ったけれど、よく見ると愛らしい顔をしてる。

「これ、メイプルフラワーの限定生産ベアだよ。本物は初めてみたっ、意外と大きいんだなぁ」

はにかんだ園崎くんが、なんだか初めて虫取りをした少年のようでつられて笑ってしまった。

「意外と詳しいんだねっ」

わたしの顔を見るなり顔を真っ赤にして、何か単語を連発するとみんなには内緒ね、とはにかみながら言った。

わたしがもちろんと言うととても嬉しそうに笑う。

「大丈夫、本棚の後ろに限定生産のベアがあったなんて言わなきゃわかんないよっ」

わたしがそう言うと、園崎くんは頬を引きつらせて「あぁ、そっち？」って言った。

そっちって、どっち？

結局、その後も定期は見つからなかった。

疲れ果て、ぐったりと椅子に腰掛けた園崎くんに自販機で買ったあったかいココアを渡す。

その隣に椅子を引っ張ってわたしも座った。
静かな部屋にふたりの缶を切る音が響く。
「ごめんね、定期見つけられなかった」
ココアの甘い香りにうっとりしていたわたしは、慌ててううんと首を振る。
「あやまらないで、園崎くん。ありがとうね、一緒に探してくれて」
「う、うん。どう、いたしまして」
「あぁっ！」
今度はなにっ？
と、でも言いたげに園崎くんが跳ねた。
「涼のこと、忘れてた……」
「涼って、三上さんのこと？」
男の子にしては大きめの瞳をパチパチさせながら園崎くんが聞く。
「うん、駅で待ってると思うの……」
そう言いながらわたしはブレザーの左ポケットに手を入れる。

……あれ？

「ケータイがない……」

「今度はなにっ！？」

今度は本当に言った。

そうだ、ケータイはバックに入れっぱなしだった。

あの時、涼に投げ渡したバックが目に浮かぶ。

「どうしよう……電話できないよ」

どうしてわたしってこうも駄目なんだろう。

もう高二も終わるってゆうのに、全然成長してない。

こんなんでこれから先、生きてゆけるんだろうか……

なんだかそう思い始めたら止まらなくなって、気が付いたら「ひくひく」泣き始めてた。

涙で揺れる景色……突然、青い色に覆われた。

顔をあげると園崎くんがハンカチを差し出してくれてる。

「あ、あぃがとぉ・・・」

何も言わず、ただ傍にいてくれる園崎くんの優しさが心地良かった。

ＥＰ０６．「呼び名」

「大丈夫？」

小さな子を優しくあやすように園崎くんは言う。

「うん大っ、丈夫。ありがと」

急に来て笑い、探し物を一緒に探させ、あげく大泣き。

我ながら面倒な子だと思った。

優しい彼の笑顔に甘えすぎだ。

よく考えればただのクラスメイトにここまで付き合ってくれるなんて、園崎くんはなんて良い人なんだろう。

そうおもったら、こんどは園崎くんの優しさに泣けてきた。

青いハンカチは、止まらない涙を吸って重くなっていた。

やっとまともに話ができるようになった頃、園崎くんがポケットからケータイを取り出すとわたしに差し出した。

ほんの少し古い機種だったけれど、とても綺麗で”携帯されているもの”と思えなかった。

優しく微笑む園崎くん、今頃になって気付いた。
園崎くんは笑うと目尻にかわいい皺ができる。
「これで電話して。きっと心配してるよ」
わたしは声にならない返事をするとプルプル震える指先でボタンを押した。
二度、コール音が鳴るとあの落ち着きはらった涼とは思えない高い声が聞こえた。
―もしも？だれです？あのいま忙しいんで……
そう言って切られそうになったから、わたしは慌てて何か喋ろうと潰れた喉でとりあえず発声した。
けど、それがかえってまずかったのか涼の口調はさらに厳しくなった。
―だれ？いま大変なんだ！ふざけてるなら切るよっ！
大変？
まさか、なにかあったんだろうか……
真っ白になりそうな頭をフル回転させ言葉を考える。
「涼、わたし、愛美だよ」

―愛美？この番号って……あんた今どこいんの？

「学校、定期、結局、無かった、よ」

―な、どうしたのその声？

「ううん、なんでもな、いよ。大丈夫だから」

―ともかく大丈夫なの？

「うん、大丈夫だ、よ。今からそっち行く、ねっ」

まだおさまらない嗚咽で上手く話せないせいか、涼の心配はまだ冷めないようだった。

「本当にありがとう園崎くん。ごめんねこんなに遅くまで……」

教室の時計は、もう8時を指していた。

「僕は大丈夫だよ。それより……川下、さん。一人で駅まで行くの大丈夫？」

園崎くんは恥ずかしいのかわたしを”川下さん”と呼んだ。

なんだか、今まであったこと全てが無かったことになってしまうような気がして、急にさびしくなった。

「園崎くん、愛美でいいよ？」

一瞬、困ったような顔をし目を反らした彼は恥ずかしそうに向き直ると”愛美ちゃん”と言って顔を赤くした。

「わたしも園崎くんのこと”巧”くんって呼んでいいかな？」

何も言わなかったけれど、彼はにっこり笑った。

あっ

そうえば・・・

突然思いついたように席に向かったわたしに彼は首をかしげた。

きっと、”まだなにかあるんだろうか”って思ってるに違いない。

机の奥からまだ読みかけの”ギターと鉛筆”を取り出すと彼のまえに掲げた。

「この本面白いんだよ。高校生の二人が織りなす激しい愛情劇を緩く描いてるんだよ」

そう言って彼に渡そうとした時、かじかんだわたしの手から本が落ちた。

「あぁ、またどこまで呼んだかわかんなくなっちゃう……」

そういって拾い上げた本の隙間から何かがペタッと落ちた。

「んっ？」

巧くんがしゃがんでそれを拾う。

「あぁぁぁ！！」

あまりの大声にわたしはまた心臓が飛び出そうになった。

「なっなに？」

巧くんは、無言のまま掴んだそれをわたしに見せる。

「定期？」

「う、うん」

そうか、あの時……

しおりが無かったわたしはバックの手の届くポケットにあった定期をページに挟んだんだ。

なにも言えなかった。

こんなに寒い思いして、巧くんなんか埃まみれになってまで探したものがまさか、こんな本の隙間にあったなんて。

先に笑いだしたのは、巧くんだった。

ＥＰ０７．「反省」

「それで、結局定期あったわけ？」

「はい、すいませんです……」

駅のホームでわたしは涼に説教されている。

あの後、大笑いした巧くんは一人じゃ危ないからってわたしを駅まで送ると一人、自転車に乗って帰っていった。

最初から一人で帰る予定だったし、家に帰ってもすることなかったから気にしないで、と言っていたけれど……

そうえば、ハンカチを返すの忘れてた。

今日は金曜日だし、次の月曜日に洗って返そうかな……

あ、電話番号聞くの忘れちゃった……

ん？そうえば！

「……っていつも言ってるでしょ？わかった？」

お母さんみたいな涼のセリフを上目使いと反省の姿勢で流すとさっそく聞いた。

「涼のケータイに巧くんの番号、残ってるよね？」

「はっ？……」

涼はもう一度顔を赤くして怒ると、疲れた顔をして教えてくれた。

ＥＰ０８．「青いハンカチ」

「やっぱり、返しに行こうっ！」

いきなりソファから立ったわたしにビックリしたのか、お母さんは啜った熱いコーヒーでむせた。

「な、なによ急に？」

階段を駆け上がったわたしは、自分の部屋に行き机の上にたたんだおいた“青いハンカチ”を優しく手に取った。

リビングのテレビはお昼のニュースを伝えている。

少し化粧気の強いお姉さんが午後の天気を読み上げている。

「この後の天気ですが……」

「愛美、どこ行くのよ？外に出るなら……」

同時に発せられた二人の話を背中で聞き流すと、わたしは玄関を飛び出した。

朝からずっと迷っていたから、服も髪も準備はカンペキだった。

飛び出したは良いものの、肝心の巧くんに連絡を取ることを忘れていた。

バックからケータイを取り出して、昨日の夜何度も行ききした”さ行”をスクロールする。

初めてが電話なんて、緊張する……

四回、コール音が鳴ると待ち望んだ声が聞こえた。

―はい、もしもし

「たっく、巧くん？」

緊張したのか出だしで噛んだ。

―たっく？……その声、愛美ちゃん？

声だけでわかってくれたっ！

それだけで、なんだかお腹いっぱいになれた。

「そ、そうだよ。あのね、いまひまかな？」

電波が悪いのか、少し返事までに間があった。

―うん、大丈夫。どうかした？

「あのね、いま姉井駅の近くにいるんだけれど……逢えないかな？」

―……。

直球過ぎたのかな？返事が無い。

慌てて弁解するように付け足した。

「ハンカチ、返すの忘れちゃってたから……」

いきなり二人で逢おうなんて言われて、引かれたかな……

早く返事してっ！

―ガチャン！

「えっ？なに、いまの音？」

―な、なんでもないよ。それよりごめん、ちょっと手が離せなくて。もう一度言ってくれないかな？

もう一度！？駄目、恥ずかしい……

「いま、姉井駅にいるんだけれどね」

―駅？もしかして、また定期失くしちゃったの？

”また”とゆうフレーズに少し落ち込む。

「その……ハンカチ返すの忘れちゃってて、だから」

―待ってて、すぐ行くからっ

そう言うと、巧くんは一方的に電話を切った。

嫌われちゃったのかな……

お昼の駅前、くっついて歩くカップルが温かそうで羨ましかった。

「行くって、どこにだろ？」

とりあえず近くにあったベンチに座る。

見上げたねずみ色の空と強く吹く冷たい風がわたしをさらに凍えさせた。

ＥＰ０９．「電話」

日曜の朝、いつもとうり7時に起きた僕は出勤する父さんと母さんを見送ると妹の優奈の部屋へ向かった。

昨日の夜、友達と遊園地に行くと言っていた中三の妹は大丈夫なんだろうか？

”受験前の最後の気晴らし”ってやつだと良いんだけれど・・・

「ノックしろよ！」

と乱暴に宣告したうさぎに一礼する。

コンコン、コンコン……

動く気配は無い。

まだ寝ているんだろうか？

「入るよ？」

朝日が厚いカーテンに阻まれて日差しが入らないのか、室内はやけに薄暗い。

高い窓から下がるカーテンを勢いよく引くと、眩しい朝日で目が眩んだ。

「うへぇ……まぶしぃだろぅ」

ボサボサの前髪を払い恐ろしい顔を覗かせる。

「もう7時半だよ。大丈夫なの？」

虚ろな目で円を描くと漫画のように巨大化させた。

「はぁ！？ふざけんなよっ！！」

誰に怒鳴っているのかわからないけど、一応返事をする。

ベットから毛布ごと飛び下りると、駆け足で洗面台へ向かって行った。

イチゴの柄の入ったマットが敷かれたフローリングにへたばった毛布をベットに上に整え僕はキッチンへ向かった。

わずか十分で出来上がったとは思えない年頃の女の子が顔を出すと、外見とは偉く違った口調で叫ぶ。

「ねぇ！なんか食いものないのぉっ？」

カウンター越しに覗きこむ彼女にコーヒー、目玉焼きとベーコンを添えたトーストを差し出す。

「さっすがッ！」

乱暴にトーストに目玉焼きを乗せると、そんなに開くものかと疑いたくなる程大きく口を開けかぶりついた。

交互にコーヒーを啜り無理矢理飲み込む。

大きな塊が喉元を流れてゆくと、うぐっと唸った。

優奈は、空のカップと皿を僕へ寄こすと素早く玄関へ向かう。

流しへそれらを置くと、棚からピンクの折りたたみ傘を取り出し差し出した。

「天気予報じゃ午後から雨かもしれないってさ。一応もっていきなよ」

口をとがらせると優奈は渋々バックに傘を突っ込んだ。

「いってきまぁす」

「気をつけてね」

聞こえているんだか、いないのか小さく返事をすると危なっかしく飛び出していった。

ため息交じりの笑みをはくと竜巻のような優奈に吹き飛ばされた靴を揃えた。

「室温で溶かしたバターを練って・・・」

昨日、近くの書店で買った「メイク・ア・パウンドケーキ」を片手に僕はキッチンに立った。

趣味で始めたお菓子作りも、もはや密かな楽しみになっていた。

何より僕が作ったものを家族がおいしいと言って食べてくれるのが嬉しいんだ。

壁に掛けた、母さんの趣味で買った音の出る時計が正午を知らせた。

オーブンから出したケーキをケーキクーラーに乗せると丁度、ズボンのポケットに入れた携帯電話が鳴った。

知らない電話番号。誰だろう？

戸惑ったが、なんだか出なくちゃいけないような気がしてフリップを開いた。

「はい、もしもし」

―たっく、巧くん？

懐かしいような気がする声が胸に響いた。

「たっく…その声、愛美ちゃん？」

―そ、そうだよ。あのね、いま暇かな？

若干上ずった声で、嬉しそうに笑った。
なんて事だろう。
まさか、愛美ちゃんから電話が来るなんて……
僕は、それだけでお腹いっぱいになったような気がした。
「うん、大丈夫。どうかした？」
―あのね、いま姉井駅の近くにいるんだけれど……逢えないかな？
どうゆう事だろう
逢えないかな、だって？
突然の事に、頭がぼーとっする。
「……。」
無言の僕に驚いたのか、慌てて愛美ちゃんは付け足した。
―ハンカチ、返すの忘れちゃってたから……
ハンカチ？そうえば、昨日洗濯カゴに入れなかったなぁ……
そうか！僕は彼女に貸したままだったんだ。
あまりにもピンときたものだから、思わず手が動いた。

その拍子で置いてあった型が僕の左足に落ちる。

ガチャン！

あっ！痛っい・・・

―えっ？なに、いまの音？

驚いた様子で愛美ちゃんの声が半音高く鳴なる。

「な、なんでもないよ。それよりごめん、ちょっと手が離せなくて。もう一度言ってくれないかな？」

痛みを堪えながら、これが夢じゃない事を確かめる。

―いま、駅にいるんだけれどね……

あまりの痛さに頭が上手く回らない。

「駅？もしかして、また定期失くしちゃったの？」

―定期はあるの。けど、その・・・ハンカチ返すの忘れちゃってて、だから

やっぱり夢じゃない！

しゃがんで靴下を下げると赤く腫れていた。

「待ってて、すぐ行くからっ！」

素早く返事をすると、電話を切った。

愛美ちゃんは、まだ何か言いたそうだったけれどこれ以上我慢できない……

冷凍庫から氷を出すとそのまま冷やした。

ジンジンと鈍い痛みが響く。

「大丈夫、冷やせばなんとかなるさ……」

なにを根拠にそう思うのか、僕は熱のこもった額も氷で冷えた手で冷ました。

ＥＰ１０．「あめ」

あれからもう二時間が過ぎてた。

何回かかけた電話に巧くんは出ない。

縛られたように手足の感覚は無く、驚く程冷たいほっぺは、歯医者さんで麻酔を打たれたみたいに痺れてる。

いつの間にか降り出した雨は少しずつ勢いを増して、土砂降りになってもまだ降り続いてる。

「巧くん、まだかなぁ……」

少し濡れた髪を触りながら、駅前の有名なコンビニの薄い屋根の下で降り続く雨粒達を見送ってた。

「これだけ待ってるんだもん。絶対来てくるよね？」

やっぱりわたしは、一人になると一人ごとを言う癖がある。

傘をさして駅に向かってく人達は、急な冷え込みに体が縮むのか首を引っ込めて走ってく。

そうえばさっき、駅とは逆の方向に走っていく人がいたような……

なにかあったのかな？

「へぇ、気がきくじゃん園崎っ」

えっ？

”園崎”とゆうフレーズに思わず顔をあげてしまった。

でしょう、と微笑む中学生くらいの愛らしい大きな瞳の女の子にそれまた同じ歳くらいの男の子。

ピンクの折りたたみ傘に体を寄せ合って入った二人は、楽しそうにわたしの前を歩いて行った。

「あのくらいの子にも、もう彼がいるんだぁ……」

なんだか思い知らされてるみたいで、わたしは背伸びして遠くまで見渡した。

「巧くん、早くきて……」

たったいま放った言葉も、雨音に消されてしまう気がした。

ＥＰ１１．「ばか親」

どうしたのかな……

電話にも出ない。

それにもう二時間近くの遅刻。

巧くんがそうゆう人だとゆう事なら仕方ない。

少し話すようになって、まだ三日とたってないんだから……

降り続く雨は勢いを増して、少しずつわたしにもかかるようになってきた。

今頃になって傘を持って来なかった事を後悔したけど遅いよね。

「そうえば、家を出る時お母さんとお天気お姉さんが何か言いたそうだったな……」

こうゆう事だったんだ……

お財布の中を覗きこんでコンビニでビニール傘を買おうか迷っていた時だった、お気に入りの歌が流れる。

音と振動を頼りにバックの中を探った。

ケータイが着信を知らせていた。

ディスプレイには”パパ”の表示、なんだかイヤな予感がする。

「もしもし？」

―おお、俺だ。ちょっと良いか？

駅からちょっと離れた所で接骨院を開くパパは、一年中暇なのか忙しいのかわからないけれど、いつも疲れた顔をしてる。

「なぁに？またお手伝い？」

これが一番やっかいなんだよなぁ……

―あぁ……聞きたい事がある

「聞きたいこと？なに？」

震える程寒いとゆうのに、何故か背中に冷や汗が流れるのを感じた。

―園崎巧を知ってる……ってか知ってるよな？

「うん、知ってるよ。同じクラスの子」

なんで、なんで知ってんの！？

まさか、お母さんが？

あ、でも巧くんに逢いになんて言ってないし……

―そうか、同級せいか。で、お前はそんな同級生になんでこんなに

電話かけてんだ？

「えっ？……」

雨なのか汗なのか、頬を雫が伝った。

「あぁ……れ、連絡網よ。ってか、なんでパパがそんなこと知ってるの？」

少し間があると、パパは唐突に言った。

―今、ここで死にそうになってる

バンッ

引き戸を思い切り押し間違えるとユルユルと開いた。

「愛（まな）、早かったな」

横をすり抜けると診察室へ滑り込んだ。

暖房でカラカラに乾いた床に雫が落ちる。

「巧くん、巧くん！」

診察室に置かれたベットの上、小さな傷がある素肌の上半身に包帯をグルグルに巻かれた左腕。

濡れて束になった髪に、切れたジーンズ。
右手をこぼすように床に落とした巧くんが横たわっていた。
「巧くんっ！！」
駆け寄って揺すぶろうとしたわたしをパパは止めた。
無言で首を横に振る。
「うそ、うそだよ……こんなことって……」
涙がこぼれた。
喉が熱くて、嗚咽がこぼれる。
溢れる悲しみを吐き出すように、大きな声を出してわたしは泣いた。
「事故ってここに運び込まれたんだ。可哀そうに、まだ若い。お前と同じ年だろ？」
そっけなく言うパパが許せなかった。
「なんで、なんでもっと大きい病院に連れて行かなかったのよっ！！」
泣き崩れるわたしの肩を優しく抱くと、パパは静かに言った。
「すまない。間に合わなかったんだ……」

すまなそうに顔を落としたパパに当たることもできず、わたしはただ泣いた。

やっと始まると思った恋だったのに、この人ならいいなと思ったのに……

まさか、こんなことになるなんて……

「巧くん！！死んじゃやだよっ！！」

「……うっ、うーん」

突然、巧くんは痛そうにうめいた。

……へっ？

パパは、幸せそうに微笑んでいた。

わたしの肩を抱いて。

「パパ、どうゆうこと？」

ライオンに睨まれた草食動物のようにパパは小さくなると、はははと微笑んだ。

「だってさ、こうでもしないと愛かまってくれないじぃーん」

巧くんの濡れた服を広い上げると、すねたような口調で歳がいも無

いようなことを言う。

マフラーとコートをハンガーに掛けると、わたしは、余ったハンガーでパパの背中を思い切り叩いた。

「だからって、なんで死にそうだなんて嘘つくの！？」

「だってぇ、寂しかったんだもんっ」

親を待つ子供のように言い放った４３歳にわたしは本気で怒鳴った。

ＥＰ１２．「白衣の恩人」

薄明かりの中、僕は目を覚ました。

白いシーツの敷かれた、少し硬めのベッド。

何かで固定されて自由の利かない左腕。

恐る恐る右手で触れてみる……

と同時に、スクーターとぶつかったことを思い出した。

無くなっていたらどうしようと心配したけれど、なんとか腕はある。

包帯でガチガチに巻かれているせいか、感覚が無い。

「ここは、病院……」

鼻を突く湿布特有のにおいがする・・・

試着室みたいに囲まれたカーテンを引いた。

薄暗く広いとは言えない室内とそこに置かれた機械。

何十年前は眩しい輝きを放っていたんだろう白い壁は、所々シミができて少し汚い。

フローリングは、白く変色してる。

「あの、誰かいますか？」

薄そうに見える壁の向こうでドアの開く音がした。

ズルズルとスリッパを引きずる音が近づいてくる……

「なんだ、起きたのか？」

白ゴマが混じったような髭を生やした長身の中年男性がヌクっと顔を出した。

一応、白衣のような服を着ているから医者なんだろう。

「あの……ここは？」

僕の問い掛けに面倒くさそうに欠伸をすると、くたびれた背もたれの付いた回転式の椅子に腰かけた。

「あぁ……」とゆう声と「ギィ……」と椅子の軋む音が絶妙に重なる。

たぶん、何年も使い続けてるんだろう。

長い脚を組んだ姿が貫録を感じさせる。

と椅子の軋む音が絶妙に重なる。

たぶん、何年も使い続けてるんだろう。
長い脚を組んだ姿が貫録を感じさせる。
「ここは、俺の病院だ。今はお前専用だけどな」
なにが可笑しいのか、ふっふっふと笑うと長い脚を組みかえた。
「あの、僕は確か……スクーターにぶつかって……」
正解、とでも言いたそうに人差し指を伸ばすと機械と並んだ棚を指した。
たたまれた見覚えのあるマフラーにコート、チカチカと点滅する携帯電話が目に入った。
「僕のですよね。あれ」
男性は、そうだと首を縦に振った。
寝心地の良いとは言えないベッドをゆっくり下り、棚へ向かう。
シーツをめくってから自分の服装が家を出た時と違うことに気付いた。
力無くうずくまった僕に、あきれたようなため息を吐くと彼は立ちあがった。
ズルズルと引きずる音が近づいてくる、その時だった……

「ダメだよっ、寝てなきゃ！」

聞き覚えのある声。

鼻先を撫でる柔らかな香りに雨のにおいが混じってる。

まさか、と顔を上げた僕は、メリッと音が出るくらい目を見開いた。

「ま、愛美ちゃん！？」

綺麗に結ばれていた髪が乱れ、赤く潤った瞳を揺らした愛美ちゃんがいた。

「骨は折れていないって……まだ、痛む？」

「あたりまえだ。麻酔を打ったわけじゃないからな」

返事をしようとしたら、代わりに答えられた。

「あ、あの貴方は？」

男性を見る。

いつの間にか口に咥えたたばこを指で挟むと風の抜けるような口調で言った。

「いひゃ」

医者？

それは見てわかります

お名前は？と、口を開きかけた時だった。

「もう、パパ！患者さんの前でたばこ吸わないのっ！」

―ぱっ、パパっ！？

ボサボサの茶髪交じりの髪、くたびれた白衣姿のこの人が愛美ちゃんのお父さんなのか！？

見れば見る程、信じられない……

背を押され、はいはいと娘に診察室を追い出されたお父さんはなんだか斬新だった。

「愛美ちゃんのお父さんって、お医者さんだったんだね……」

痛む体を彼女に支えられながら先ほどのベッドに転がす。

「うん、一応ね。接骨医なの、最低なヤブ医者だけどねっ」

「いやいや、それは怒られるって」

笑おうとしたら胸が痛んだ。

間髪入れずに愛美ちゃんは、背中を優しくさすってくれる。

ありがとう、と力なく微笑んだ。

「でも、なんでわかったの？僕が事故にあったって」

傍にあった簡易的な木製の椅子を引っ張りパンパンと叩くとちょこんと座った。

「わたし、駅前のコンビニで待ってたんだけどね……」

彼女は一通り話終えると、疲れきった顔をコクリと落とした。

「それじゃ、僕は愛美ちゃんのお父さんに助けてもらったんだね」

「お父さん、なんて呼ばれる筋合いは無いぞ。坊主、診察料は一億円だ」

いつの間にか、あの診察椅子に座った……

「お父さん」

は、長い脚を持て余すように組むと火の付いてないたばこを口に咥えた。

「なに言ってんのよパパ。そう言うなら、診察料はわたしが払う！」

「えー、ならタダでいいよぉ～」

なんてゆうか、愛美ちゃんのお父さんって面白い人だな。

外見は、ちょっとアレだけど……

娘を思う良いお父さんだ。

Ｅｐ１３．「夜風」

壁に掛けられたモノクロ時計の針は、２１時を過ぎていた。

「すみません、僕は一度家に戻ります。必ずお金は持ってきます、だから……」

優しく「そんなの必要ないよ」

と愛美ちゃんは言ったけれど、やっぱりそうはいかない。

よろよろ立ちあがった僕は、ゆっくりと外へと続くドアへ向かった。

ゆっくり引き戸を引くと冷たい夜風が頬を撫でた。

電灯に照らされた、たぶん雨で黒く染まったアスファルトの駐車場。

横たわるハンドルの曲がった僕の自転車。

ステンレス製のフレームについた、いつくつもの引っ掻いたような傷。

もう乗れそうにない。

「自転車、壊れちゃったね……」

僕を支えるように傍に立った愛美ちゃんは、悲しそうに呟いた。

ズルズルとスリッパを引きずって出てきたお父さんは、バサバサと

僕の髪を撫でると僕にコートをかけマフラーを巻いてくれた。

「言ったろ、診察料はいらないって。愛に感謝しろよぉ。気をつけて帰れよ」

お父さんはそう言うと、「おぉさぶい」と言って暖房機の前に張り付いた。

「だってさ。お家に誰かいる？」

そうえば、今日は父さんも母さんも遅くなるって言ってたっけな……

「う、うん、大丈夫。たぶん家に誰かいるからそこまで迎えに来てもらうよ」

「なら、途中まで一緒に行くよ。一人で立ってるのつらいでしょ？」

―え、まずい。

歩いて帰ろうと思ったけど……たしかに言われた通り辛い。

携帯電話を取り出して一応、家に電話をかけてみた。

―はい、もしもしぃ？

思いっきりの外行き声で優奈は愛想良く答えた。

「あ、僕だよ。父さんいる？」

―なぁんだ、たく兄か。パパならいないよ、まだ帰ってないから

「……あ、もしもし父さん？今、ちょっとワケあって駅の近くの公園にいるんだけれど、怪我しちゃってさ。悪いんだけれど迎えに来てくれないかな？」

―はぁ？意味分かんないんだけど！パパはいないっつうの！

「それじゃあ、”お願い”ね。ばいばい……」

―ちょっ、たく兄？……

一応、連絡はした。優奈は気付いてくれるかな……

多少は遅くなっても仕方ないか。

ノッポの電灯ひとつしかない公園は、冷たい夜風が頬と散った木の葉に吹き荒れる。

愛美ちゃんが公園近くの自販機から”あったかいココア”を二つ買ってきてくれた。

缶を握る右手がジリジリとかゆくなる。

「あの時もこうやって一緒にココア飲んだよねぇ……」

愛美ちゃんは、懐かしそうに呟く。

「そうだね、なんだかずいぶんと前の事みたいだ。本当は僕、１０年くらい眠っていたんじゃない？」

笑いながら冗談を言ったつもりなんだけど、愛美ちゃんは真面目に答えた。

「そんなはずないよ！だって、わたし、巧くんが眠ってる間ずっと起きてたもん！」

そ、そうだよね。

と呟いた僕に愛美ちゃんは、そうだよ！と嬉しそうに微笑んだ。

小さな手の平でコロコロと缶を転がす愛美ちゃんと僕は、他愛もない会話をした。

二人で同じくらい笑い合うと、さっきより倍くらい強くなった夜風に顔をしかめた。

「たっく、なぁにやってんのよ？」

見ると見覚えのある赤いコート、肩までの髪を首と一緒にマフラーで巻いた優奈が現れた。

口の元から薄く白い息が風に流れてく、走って来たのかな？

あ、と驚いた顔をした愛美ちゃんだったが、母親譲りのほとんど僕と同じ顔の優奈を見ると”何か”に納得したようだった。

「妹さん？」

クルリと首を傾げて呟く。

「うん」と返事した。

「あら、お邪魔だったぁ？こんばんは、妹の優奈です」

僕にツッコミ、愛美ちゃんに向き直る。

これまた外行きの声で愛嬌たっぷりのあいさつをする。

「ご丁寧にどうも。わたしは、川下愛美っていいます。よろしくねっ」

女の子同士の初対面ってゆうのは、どうもなにかを感じる。

ゆっくり近づくと優奈はジロジロと愛美ちゃんを見た。

「ど、どうかした？」

困った愛美ちゃんは、恥ずかしそうに俯く。

「愛美さんって、お兄ちゃんの彼女さんですか？」

「えっ！？」

「なっ！！」

そんワケないよ！

と否定されると思ったけれど、愛美ちゃんはただ薄暗くてもわかるくらい顔を真っ赤にしていた。

「本当にありがとうございました。ふつつかな兄ですがこれからもよろしくお願いします」

一著前にあいさつすると、優奈は僕を引きずるように歩きだした。

「愛美ちゃん、ありがとね。あ、お父さんにもっ！」

優しく微笑むと彼女はコクリと頷いた。

「たく兄、愛美さんの事好でしょ？」

なかなかストレートに物を言う妹だ……

「う、うん。まぁ……」

「ふぅん。でも、もっとハッキリしないと逃すよ？」

「わ、わかってるよ」

顔だけ僕に向けると優奈は、ふふっと笑った。

ＥＰ１４．「生まれた時から」

巧くんが帰ったあと、わたしは、ひとり残ったココアを飲みながら考えた。

ユナちゃんがわたしに”彼女さんですか？”

って聞いた時、巧くんは否定しなかったな……ってことは

「脈あるのかなっ！？」

いつの間にか身についたひとりごとは、もう離れないなとも思った。

「遅かったなぁ」

病院まで行くとパパはシャッターを閉じているところだった。

「うん、まぁ……帰る？」

近寄ったわたしにカギを渡すと親指で車を指した。

乗ってろ、ってことかな。

夜に潜むような黒のボディ、少し年期が入ったパパの愛車。

病院と違ってピカピカに磨かれたボディに電灯で照らせれたわたしの顔が映った。

「えぇっ！？ひっどい……」

ボサボサになった髪、頬に残る涙のあと。

こんな顔で巧くんに逢っていたと考えると、凍えて青くなった指先からさらに血の気が引いてくような気がした。

勝手にエンジンをかけ、エアコンの暖房をガンガンにつけていたらパパに怒られた。

寒かったら後ろのシートに乗せた毛布をかけろ、って少ないお小遣いで生活するのは大変みたいだ……

言われたとうり毛布をかけたら、あったかいけどたばこ臭い。

せっかくの高そうな毛布が台無し。っていうかこれでガソリン代浮くの？

毛布なんて乗せてるってことは、ふだん車で寝てるの？

とも思ったけど口にはしない……

「今日はありがとね、パパ」

赤信号で止まり、パパは、ヘッドライトを消すとハンドル握ったまま顔を向ける。

「愛のためなら、パパは吹雪の中だってノーパンで進むよ？」

「やめて。っていうか、なんでノーパン？服着たならパンツも履きなよっ！」

ははは、と笑ったパパは信号が青になると慌ててライトを点けようして間違えてウインカーをだした。

「帰り道も忘れちゃったの？」

笑いながら言ったわたしに、大真面目に答える。

「だって、パパ緊張してるんだもん。愛と一緒に車乗るのなんて久しぶりだし」

わたしの相槌を待ってパパは続けた。

「ママと初めてデートした時の事、思い出す……」

そっか、ドライブデートだったんだ。

「パパが運転したの？」

慣れた手つきでカーブを曲がる。

「ううん、ちがーう」

「じゃあ、ママが？って免許無いよね……お友達？」

「ううん、ちがーう」

じゃあ、誰よ？と問いただそうとしたらパパが唐突に言った。

「バス。隣同士座って箱根まで観光に行ったんだっ」

……はい？

初デートがバスで、しかも箱根まで観光？

「よくママが良いって言ったね……」

よくわからないショックでうつむいた……

「うん、大変だったんだよ。車酔いで」

「……ママが？」

「パパがぁっ」

さいあくだ……

「パパ、わたしは、ママに似てる？」

いきなり言われて驚いたのか、パパは運転中なのにまじまじとわたしの顔を眺める。

前向いて！、と言ったら振り向きついでに言った。

「もちろん。目元なんてママそっくりだよ。あ、でも耳はお祖母ち

ゃんに似てるなっ。特に耳たぶ」

「耳たぶってなによっ。そう、ちゃんとママに似てるんだね……」

なんだか嬉しくて、またのどの奥がヒリヒリと痛む。

「愛は、写真でしかママを見た事ないもんね……でもね、ママはいつも愛と一緒にいるよ」

「えっ、どうゆうこと？」

急にしんみりと語り出すパパに、冗談を言う時とは違った笑みが浮かぶ。

「愛美の”愛”って字はママの愛子から取ったんだよ。だから、愛が生まれてからずっとママはそばにいるだ」

初めて聞いた。

愛子っていう名前は知っていたけど、わたしの名前がママから取ったなんていままで一度も聞いたことが無かった。

「でも、愛っていう字は同じでも愛美とママは全然違うなぁっ」

なんか勘にさわるな。

「どうゆう意味よ？」

パパは、またいつもの抜け顔に戻ると言った。

「ママは、すっごくおしとやかで大人だった！」

歯を覗かせて笑ったパパに精いっぱい皮肉を言ってみた。

「わたしの抜けたとこは、パパのせいよっ」

あらら、と口では言ったけれど、パパは少し嬉しそうに微笑んだ。

「パパ、ママのこといまでも好き？」

少し速度を落とすと、一瞬だけ振り向いてパパは言った。

「大好きだよ」

「ママとわたし、どっちが好き？」

パパは少し考えると答えた。

「愛は、どっちが好きなんだ？」

質問に質問で返された、と少し頬を膨らませながら言ってみた。

「ふたりとも大好きだよ」

大きく頷くと

「パパもだよ」

って優しく言う。

いつの間にか、胸元までかけていた毛布がなんだか暑く感じる……
静かになった車の中で、いつの間にか風の吹き出す音がしてる。
よく見ると、暖房がついていた。
パパの横顔を眺める。
きっと、ママもパパのこうゆう優しさに惹かれたんだろうなぁ……
わたしもいつか、こうやって誰かを大切にできるのかな？
窓ガラスに映った顔は、我ながら幸せそうに見える。
「ね、巧くん……」
放った言葉は、あったかいぬくもりに包まれてゆくような気がした。

Ｅｐ１５．「優しさ」

朝のホームルーム、少し遅刻気味に巧くんはやってきた。

相変わらずの痛々しい左手……

一時間目の前、元気のない花みたいにぐったりと机によれた姿に色々と想像が浮かぶ。

ちょっと話し掛けずらいな……

いつものザワザワ言葉が飛び交う教室、なんだか二人の距離がリセットされてしまったような気がした。

「愛美？どした、なんか元気ないじゃん？」

優しくわたしの肩に手を乗せると、涼が言った。

「実はね……」

短く、出来るだけ上手く伝わるように説明した。

ちゃんと伝わってるのかわからないけど涼は、

「あぁ」

とあいまいに頷くと耳元でささやいた。

「園崎はシャイなんだよ。きっと」

駆け回る子供を見守る母親みたいな言い方だった。

見ると

「その怪我どうしたのっ？」

とかみんなに聞かれてる巧くんは、なんだか適当に笑顔を浮かべて答えてるように見えた。

「そぅ……だね」

チャイムが鳴るほんの一瞬、巧くんと目が合った。

でも、すぐにせわしなくパチパチと瞬きをすると、プイッと横を向いてしまった。

シャイ、ね……

ノートを取り出す自分の手が少し荒れていた。

お昼、いつものようにみんなと机をひっつけていたら巧くんが一人でスッと教室を出て行くのが見えた。

じっとドアを見つめていたわたしに気付いたのか、涼が小さな声でささやく。

「行かなくていいのか？」

「だって、なんかいつもと雰囲気違うし、避けられてるみたいだし……」

怒ってる、とは違う”なにか”が彼の背に張り付いてるみたいだった。

「でも、園崎はいつもあんな感じだよ？」

そうだっけ……

「とにかく、園崎のとこ行ってきなよ。あとは適当に言っとくから」

そう言って、わたしにしか見えないようにみんなを指さす。

「うん。行くだけ行ってみるっ」

バックを両手で持ち直すとドアに向かった。

「愛美っ！」

わたしの手を握ると涼は優しく、でもしっかりと両手でわたしの手のひらに”なにか”を乗せる。

ゆっくり開いてみると、涼愛用のハンドクリームだった。

「これ、涼の大事な高いやつでしょ？」

そう言ったわたしに優しく微笑む。

「好きな人のトコに行くのに、そんな荒れた手じゃアレでしょ？」

久しぶりに白い歯を覗かせて微笑むと、目じりに可愛らしいしわが寄った。

涼もやっぱり、なんだかんだ年頃の女の子だ。

「ありがとう。じゃあちょっと使わせてもらうね……って、好きとかまだっ！」

トイレの鏡の前に立って髪を直す。

涼の優しさが嬉しくて、何度キメても顔が緩んじゃう。

「そうえば、巧くんはどこにいるんだろう……」

生徒で賑わう渡り廊下に彼の姿は見えない。

すると、ポケットに入れていたケータイが震えた。

まさか、と開いてみるとやっぱり涼からのメールだった。

言い忘れたっ園崎はたぶん図書室だと思うよっ！

なんで知ってるんだろ……

少し考えてみたけれどわからない。

とりあえず、「ありがとう」と送信するとB棟二階の図書室へ向かった。

お昼のB棟は全然生徒がいなくて、すごく静かだ。

さっきまでのばか騒ぎがウソみたい……

一番端まで来ると教室二つ分くらいのスペースを取った図書室が見えた。

ガサガサと中で音がする。

一呼吸置くとゆっくりドアを引いた。

「た、巧くん。あのねっ」

おそるおそる顔を上げた先、二人の生徒がいた。

男子生徒と女子生徒は紙一枚がやっと入りそうなくらい顔を近づけて、二人揃ってわたしを見てる。

……えっ？

なにかが落ちる音がした。

それがわたしの落とした生徒手帳だと気付いたのは、ずっと後のことだった……

ＥＰ１６．「貸し出し期限」

ガタンッといきなりドアが開かれると女の子が駆け込んできた。

肩で息をし、髪を振り乱して……

僕の存在に気付かないのか、何か呟いている。

声を掛けようか迷ったが、もう少し様子を見る事にした。

その子の仕草や雰囲気が凄く僕を惹きつけたからだ。

「……んで、図書室にいるって言ったじゃん……のばかぁ」

どうやら何か問題が起きているようだ。

握っていた鉛筆を静かに机に置くと、もっとよく声を聞こうと耳を澄ました。

「巧くん、やっぱり……なのかなぁ」

巧くん？もしかして……

「ま、愛美ちゃん？」

僕がそう言った途端、

ひゃっ！？

と悲鳴にも似た声を上げるとゆっくり振り返った。
まるで人形のように口をパクパクさせると、口の動きに少し遅れて声が出た。
「た、巧くん？えっ……なっなんでここにっ？」
まるで恐ろしい物を見たかのような口調だ。
「僕は図書委員で、昼休みはこの管理室で本の整理とかしてるんだよ」
あぁと少し高めの声で返事をすると、彼女はゆっくりと半開きだったドアを閉じた。
それから、そっちに行っても良い？と聞く。
もちろん、と僕が返事をすると嬉しそうに僕の隣に椅子を引っ張り座った。
元々狭い管理室だ、二人も座れば狭くなる。
ほとんど寄り添うような形で、高鳴る心臓の音が彼女に聞こえるんじゃないかと心配になった。
「そっちの部屋で、その……」
頬を赤く染めながら、恥ずかしそうに話す。

さて、なにかあったんんだろうか？

「たぶん、先輩が……」

「もしかして、それって……アレとか？」

たぶん、いつもの人達だ。

なんだか、よくわからない表現をした気がするけれど愛美ちゃんが頷いたからまぁいいか……

「うん、刺激的なっ」

頬を赤く染め、恥ずかしそうに笑う。

その仕草や表情なにもかもに僕の心は揺さぶられていく。

「そうえば、愛美ちゃんどうしてここに？」

急に我に返ったように瞳を大きく開くとゆっくり口を開いた。

「ハンカチ、結局昨日返し忘れちゃったから」

そう言って綺麗に折りたたまれたハンカチを取り出すと僕に差し出した。

「あぁ、でも別にいつでも大丈夫だったのに」

極力、笑いながら言った。

「ううん、すぐ返したかったの」

ほんの少しだけ悲しそうな顔を見せると、愛美ちゃんは首をかしげた。

「そう？ありがとうねっ」

そう言って受け取ろうとした時だった、僕の伸びすぎた指が愛美ちゃんの潤いある柔らかな手に触れた。

あっ、と二人同時に言ったもんだからなんだか可笑しくて、しばらく笑いあっていた。

しばらくして余韻が冷めると、愛美ちゃんが言った。

「巧くん、ご飯は？」

自分のバックを持ち上げると僕を真っ直ぐ見る。

「うん、まだだけど……愛美ちゃんは？」

嬉しそうに微笑むと、弾んだ声で言う。

「わたしもっ。ねぇ、一緒に食べよう？」

潤んだ瞳を揺らすと綺麗に揃った白い歯を覗かせた。

「うん。じゃあ、ちょっと待ってね」

机に散らばったプリントや書類を整理すると、クリップでまとめた。
少し埃っぽいから側にあったティシュで軽く拭く。
「どうぞっ」
「ありがとっ」
向かい合うように座り直すと愛美ちゃんはバックに手を突っ込んだ。
ゴソゴソと何度か探しまわると、あっと飛び上がった。
「お弁当、教室に忘れちゃったかも……」
やっぱり、ほおっておけないよなぁ……
僕は弁当を取り出すと愛美ちゃんの前に置いた。
「これ、よかったら食べて」
えっ？
と驚いたようにまた飛び上がると慌てたように付け足した。
「いいよ、わるいよっ。教室まで取りに行くから大丈夫だよっ」
そう言った矢先、グゥ～と愛美ちゃんのお腹が鳴ってしまった。
思わず噴き出した僕に怒るかと思ったら、恥ずかしそうに顔を背け

た。

「食べて、僕は、そんなにお腹減ってないからさ」

微笑むと、じゃあと言って座り直した。

「いただきますっ」

照れくさそうに笑う愛美ちゃんについつい見とれてしまう。

あんまりにもじっと見つめ過ぎると

本当は食べたいんじゃないか？

と思われそうだから、もう既に目を通したプリントにもう一度目を通す事にした。

1、貸出の期限は、

「んっ、美味しい！」

一週間……

「そっか、良かったぁ」

僕が作ったんだよ！

とは、とても恥ずかしくて言えなかった。

Ｅｐ１７．「オレンジ」

図書室での時間は、あっという間でわたし達は、鳴り響くチャイムを合図に立ち上がった。

「明日も来ていいかな？」

巧くんのお弁当箱をバックに入れながら聞く。

「うん。愛美ちゃんが良いなら喜んでっ」

子供みたいに笑う巧くんは、うそやお世辞を言っているようには見えなかった。

「ホントっ！？ありがとう」

この人の前だと自然と笑顔がでてくる……

それからわたし達は、並んで教室まで戻った。

「涼、帰ろっ？」

放課後、教室に残っていたのは、わたし達だけ。

涼は、静かに立ち上がり座っていた椅子を机の下に入れ頷いた。
下駄箱脇の販売機で、紙パックの紅茶を買うとわたし達は校舎を出た。
校門まで続く並木。
沈みかけた太陽、優しいオレンジ色の夕陽。
グランドを駆けるサッカー部と軽快な金属音を響かせる野球部。
トラックに並んでいるのは陸上部の1年生かな。
「背の高い、いいオトコだな」
吹く風のようにサラっと、でもどこか惜しそうに涼は言った。
「へぇー。涼、タイプ変わったの？」
覗き込んだわたしから逃げるように顔を背けると涼は、勢いよく紅茶を吸った。
「ヘンなのぉ。タコみたいだよ？」
口を尖らせる涼は、なんとも可愛いらしい。
こんな彼女を独り占めできるなんて……たまらないよ。
「涼の彼女も悪くないねっ」
微笑んだわたしに涼は、でこピンを見舞った。

「いったぁ……ちょっとは加減してよお！」

顔を上げた先、夕陽の色とは違う、頬を赤く染めた涼が笑った。

「ばか」

涼は、大きくゴホンとすると大股で歩きだした。

「ねぇ、怒ったぁ？」

背中に飛びついたわたしに涼は、真っ赤な顔を振った。

Ｅｐ１８．「迷子」

僕は、公園のジャングルジムにいた。

いつの間にか夕陽は落ち、月が輝いている。

月明かりに照らされて見える雲の流れ。

少し冷たい夜の風が頬を撫で、ほのかな湿気が髪を包む。

温かかった缶コーヒーは冷めていたけど、中身は少しも減ってない。

イッキに飲み干しても、額に残る払えない微熱と眠気のような感覚は、さめなかった。

―愛美ちゃんは、どう思ってるんだろ……

二人で定期を探したのはつい先日の事。

でも、僕はそのずっと前から愛美ちゃんを探してた。

渡り廊下、集会場の体育館。

教室じゃ見れない彼女が見たくて、知りたくて。

でも、いつも大勢の女子の輪にいる彼女に声をかけられる程の勇気が僕にはなかった。

だからあの時、教室に突然愛美ちゃんが現れたのには心から驚いた。

そして、チャンスだとも思った。

それから事は、僕が思っていた以上に恐ろしく進んだ。

半年以上もアドレスすら聞けなかったのに、愛美ちゃんから電話がかかってくる。

しかも「逢える？」なんて……

お父さんの病院で見せたあの涙は、やっぱり……

「お兄ちゃん大丈夫？」

いつの間に登ったのか、隣にまだ小学校低学年くらいの男の子がいた。

色白の頬にくりくりの目、母親が切ったのがわかる綺麗に横一列にならんだ前髪。

小さな両手は、まだ柔らかそうに見えてもしっかりと力強くパイプを掴んでいた。

「あ、うん。大丈夫だよ。ありがとね」

微笑み返すと男の子も満足気に笑った。

それにしても、当然来るであろうと思っていた親の呼び声がない。

こんな時間だ。
子供一人で遊ばせるはずないと思うんだけれども……
「ボク、お母さんは？」
男の子は俯くとゆっくり首を振った。
「そっか。じゃあ、誰と来たの？」
「タケシくん」
友達かな？
でも、僕ら以外の人影はない。
「タケシくんは、いまどこにいるの？」
「わぁかんない」
「えっと、じゃあさ……」
一通り聞き終えると彼、アキくんは危なかっしくジャングルジムから飛び降りた。
「いこう！お兄ちゃん」

駆け出すアキくんを追った。

なんでも彼は、隣町から来たらしく一緒だったタケシくんの塾に付き合わされたらしい。

でも、タケシくんに先に帰られてしまい帰り道がわからなくなってしまったそうだ。

「お腹空かない？」

「ジュースのみたい！」

―弟がいたらこんな感じなのかな？

優奈は男勝りだけど、やっぱり少し違うな……

勝手な想像の世界は膨らんで、袖を引っ張るアキくんに連れ戻された。

「あ、駅ついたね」

「うん。でんしゃだよ」

ホームにあまり人はおらず、僕らはベンチに並んで腰を降ろした。

「きっとお母さん、心配してるよ」

家の電話番号がわからないんじゃ電話の仕様もない……

無邪気に電車へ手を振る彼に、危機感というものはまだないようだ。

彼の寒そうな首元にそっとマフラーを巻いてあげた。

Ｅｐ１９．「迷子２」

駅まで来た僕らは、改札で立ち止まった。
「アキくん、どこから電車に乗ったの？」
大きな路線案内板を見上げながら、アキくんは首を振った。
「そっか、わかんないか……」
どうしようか
「なにか目印になるものある？」
「めじるし？」
「うん」
俯いたアキくんは、地面についたガムのあとを靴で擦りながらうなり始めた。
「あっ！おっきなピンがあった」
「ピン？なんのピンなの？」
「ボーリングの倒すやつ！」
「白くてキュッてなってるやつ？」
「うん！」
ここらへんでボーリング場なんてあったかな……
ふだんあんまり出掛けないせいか、心当たりがない。
「アキくん、他になにかある？」
「えーほかぁ？」
アキくんが顔を上げたのと僕が名前を呼ばれて振り向いたのは、たぶん同時だった。
「愛美ちゃん！三上さんも」
階段を登ってきた二人が手を振る。
愛美ちゃんは、アキくんを見るなり驚いた。
「園崎、弟いたのか？」

三上さんは、いつもどうりの冷静な口調で言う。
「たぶん……いや、たぶんじゃない。迷子だよ」
「迷子？ボク、どこから来たの？」
いつの間にかしゃがみ込んだ愛美ちゃんが、優しくアキくんに問いかけている。
―二人とも今まで学校にいたのかな？
そう考えると同時に、僕の視線は愛美ちゃんに向かう。
制服の上からでもわかる華奢な肩と色白で細い小さな手。
真上から見る髪は、今日も綺麗だった。
なんだか、見方がいやらしいな。
自分を責めると共に僕もしゃがみ込んだ。
「へぇーボウリング場があるんだ！」いつの間に聞き出したのか、愛美ちゃんは「はっはーん」と頷いた。
「それ、たぶん青原だな。隣の駅だったよな？」
三上さんの問いかけに愛美ちゃんは頷き、立ちあがった。
「じゃ、行こっか！」
手を繋いで歩き出す愛美ちゃんとアキくん。
行くって、みんなで？
首を傾げている僕の横で三上さんが声を上げた。
「愛美、切符。……ちがっ、そっちは下り」
なんだか、楽しそうなことになってきたな……。

EP20．「ラテ」

「本当にありがとうございました。ほら、亜樹もちゃんとお礼しなさい」
「ありがとう。おにーちゃん、おねーちゃん！」
嬉しそうに笑う亜樹くんと、安心しきった顔のお母さん。
「どういたしまして。亜樹くん、今度は気をつけるんだよ。電話番号、きちんと覚えるんだぞ」
微笑み、頭を優しく撫でた巧くんは、すごく大人に見えた。
少し子供っぽいかなと思っていたわたしは、すっかり見る目がない。
でも、こうしてまた巧くんを知れたことがなにより嬉しい。
子供と遊ぶ彼なんて、学校じゃ絶対に見れないと思うし……
「それじゃあね。亜樹くん元気でね！」
わたし達は、お互いが見えなくなるまで手を振り続けた。

亜樹くんの家からさっき通った道を戻り駅に向かう。
すっかり暗くなった路地に冷たい夜風が吹きこむ。
ふと、巧くんが言った。
「なにか、あったかいものでも飲まない？」
小刻みに動いてるのは、凍えてるの？
涼に目で訴えかけると「そうだな」と頷いてくれた。
「じゃ、あそこにしよう？」
駅前のビルの一階、有名なファーストフード店を前に店を構える喫茶店。
選んだ理由はかんたん。
キャラメルラテ半額！とピカピカ光る看板にくぎ付けになったから。
「よし！そうしよう」

きっと巧くんもアレを見たんだ。
キャラメルラテ好きなのかな？
だったらいいな。好きなラテが一緒ってきっと大事っ！
「ほら、愛美行くぞ？」
いつの間にかふたりが先にいる。
巧くんは寒さに耐えられないのか、ちょこちょこジャンプしてる。
「ごめんね、ちょっと考えごと」
駆け寄ったわたしに涼がそっと耳元で言った。
「園崎、あの電灯看板綺麗だねってよ。愛美が見とれてたのに見とれてたからなっ」
ニヤつきながら歩き出す涼。
え？……あー、ラテじゃないんだ。
複雑な心と元気に光る看板。
「わたしもこれくらい光れば、巧くんはきれいって言ってくれるのかな？」
え？
と固まった涼は、冷凍されたシュウマイみたいにシワシワのカチカチになった。
「意味、わかってる？」
「え？もちろん！あれくらいピカピカなのが好きってことでしょ？」
無理やり解凍された涼シュウマイは、皮がやぶれてヘナヘナになった。
「そうだね……ま、いつかわかるよ」
それっきり涼は、お店にはいっても静かになって巧くんは猫舌なのか注文したブラックコーヒーを真剣にふーふーし続けた。
わたしは、泡いっぱいのキャラメルラテを飲んでカールおじさんのまねをして笑ってた。
三人とも大人なお店の雰囲気とちょっと違ったかな。
お客さんがわたし達だけでよかった。
たぶんいちばんホッと胸をなでおろしたのは、お店のマスターさん

だと。

Ｅｐ２１．「自分らしさ」

「それじゃ、気をつけて帰ってね。それと、今日はありがとう」
喫茶店から出ると、巧くんは、そう言って笑うと駅のホームに向かって歩き出した。

「どうするんだ？」
「え、なにを？」
質問に質問で返されたせいか、涼は、一瞬むっとするとまたいつものあきれ顔で笑った。

「園崎のこと、見送らなくていいのか？」
そう言われてふり向いた先に彼の姿はもうなかった……

「うーん、でも引かれないかな？」
「なに言ってんだ？そんなこと言うなんて、愛美らしくないぞ」
そ、そうかな？口から出かかった言葉をさえぎって涼は、冷静な口調で続ける。

「いつも何考えてるかわかんなくて、いきなり思いたって行動する。それが、愛美だろ？」
「うーん……なんだか、複雑だな。それって誉めてくれてるの？」
あ？とわたしを見つめた涼は、何度目かの瞬きと同時に首を横に振った。

「え？じゃ、どういう意味なの？」
ニカッと笑った彼女は、自分の右手をわたしの頭のてっぺんにのせて言った。

「あたしは、愛美のそういうところが好きだ。ツッコミがいあるしな。でも、たまにあきれるけどっ」
「あきれるって！……でも、ありがと。涼がそう言ってくれるとすごく嬉しいよ」

自然にいつも笑顔でいられる。涼と、巧くんはちょっと似てるな……

「ほらっ電車来たぞ！」
ホームに流れ込んでくる電車、もう時間がない！
「うんっ行ってくるね！」

飛び出したわたしは、きっと危なっかしくてまた涼をヒヤヒヤさせたと思う。
また、あきれて笑ってるかな？
わたしは、真っ直ぐ走り続けた。

息を切らしてたどり着いたホーム。ちょうど電車に乗り込む制服の男の子が見えた。

「巧くん！」

たった一言、それだけを言うのが少し遅かった。
電車のドアは閉まり、何事もなかったかのようにいつもと同じようにゆっくりと走りだした。

Ｅｐ２２．「しろ」

「巧くん！」
発車時刻表を一人頷きながら眺めていた僕は、突然名前を呼ばれて振り返った。
ホームの奥、電灯に照らされて肩で息をする女の子が見える。
今行った電車を見つめて、残念そうに顔を伏せた。

愛美ちゃん？

その後ろ姿は、やっぱり愛美ちゃんにしか見えない。
もしかして、また一番線と二番線を間違えてる？
でも、どうしたんだろう？
ぐったりと顔を上げる気配がない。僕は、そっと近寄った。

「愛美ちゃん、どうしたの？」
「えっ！？」
普段見せない、恐ろしく早いモーションで顔を上げるとその瞳を限界まで大きくした。

「巧くん？え、なんでいるの？」

な、なんでって……

「いや、まだ電車来ないし」

しばらく真顔で瞬きをしていた彼女は、大きく頷くとパチン！と手を叩いた。

「まちがえた！」

あぁ、やっぱり……

「えっとね、巧くんのことを見送ろうと思って」

え、見送る？

僕は、自分の耳が寒さでおかしくなったんじゃないかと引っ張った。

チクチクと鋭い痛みを感じる。

「どうしたの？耳冷えた？」

首を傾げると同時に揺れる髪、口元からこぼれる白い息。

たしかに今、僕の目の前に彼女は存在していて、たしかに彼女はこう言った。

巧くんを見送ろうと思って、と。

完璧に真っ白になった、勉強不足で挑んだテストの絶望的な一問目よりも、弁当を忘れた事に気づく四限目よりもずっとずっと。

「顔、すっごく赤いよ？」

「……あ、いや大丈夫。うん、だいじょうぶ」

もう、寒さなんて感じない。

ふと見た愛美ちゃんだって顔が赤い。

「あ、そこ座る？」

ホームには、僕ら以外誰もいない。

電車が来るまで、まだ時間はある。

「そうだね、座ろっか」

並んで俯く二人、きっと傍からみたらケンカしたカップルみたいに見えたりして……

「少し、寒いね」

そう言って愛美ちゃんは、腕を組む。

細い肩の曲線が小刻みに震えている。

「なにか買ってくるね」

続いて立ち上がろうとする彼女を止め、僕は駅内の自販機に向かった。

あったか〜い、の文字がグルグルめぐる。

気づけば僕は、冷たいコーラのボタンを押していた。

「あ、やっべ」

そう焦って取り出し口に手を入れる。でも、なんでだろ。なにもない。

おかしいな、と立ちあがった時、まだお金を入れてなかったことに気がついた。

EP23．「青いマフラー」

「はい、どうぞ」

あったかいココアを差し出した巧くんは、カチカチ動くロボットみたいに隣に座った。
ふたり揃って缶を開けると、突然「あ、隣良い？」ってもう座ってるベンチを指さす。
なんだかすごく面白くて、さっきの亜樹くんみたいに「どぉぞ」って子供みたいな言い方をしちゃった。

タイミングのズレた後で、言ったことに自分でも笑ってしまったのか、わたしの言い方の問題か、巧くんは苦笑いに近い笑みを浮かべると首をすくめた。

電車が来るまであと、どれくらいしかないんだろ？

横目で盗み見る彼の横顔。
キレイでカッコ良くて、ちょっと可愛いかった。

学校帰り、駅のホームでふたりっきり。
まるで、映画に出てくる恋人同士みたいで顔がニヤけちゃう。

でも、俳優さんや女優さんが演じないような　なにか　がわたし達にはある。
言葉にできないそれを早くなくせれば良いな。
寄り添えないもどかしさ、今はちょっとずつ向き会ってお喋りで埋めて行こう。

この気持ち、きっと　恋　だよね？

大きな音と規則的な振動、電車が駅にやってくる。
ふたりの減ったモノがこのココアだけならいいな。
簡単にできるとは、思ってなかったけれどやっぱり涼にするみたいには、巧くんにできない。

もどかしさが胸を締め付ける。
ふとその時、青いマフラーがそっとわたしの目の前に現れた。
それは、そのまま優しく首元に心地よい温もりを運んでくれる。

はっ、と顔を上げた時。
閉じる電車のドアの向こうに手を引いて、優しく微笑む巧くんの姿があった。
プシュ、と空気の吹き出す音が今のわたし達に残された時間がもう少ないことを知らせる。

「あ、ありがとう！」

なんとか通じたのか彼は、嬉しそうに頷くとなにか言いたそうに口を動かした。
でも、響く電車の音とたった今閉じてしまったドアで声なんて全然聞こえない。

わたしは、瞬きさえ惜しむくらい巧くんを見た。
そんな剣幕に押されたのか、さっきみたいに苦笑いを浮かべ見やすいように大きく口を動かしてくれた。

「う、し、ろ。か、ば、ん」

どういうこと？

ふと横目で振り向いてみると、そこには自分でベンチの上に置いた缶が倒れ、そこからこぼれたココアがボタボタとわたしのバックに降り注いでいた。

「えぇ！？」

駆け寄ろうとした時、電車がゆっくりと動き出した。

あっ！

すれ違うように見えた彼の顔は、すごく赤く染まってて柔らかな笑顔を浮かべていた。

微笑み返したわたしは、きちんと届いたかな？

甘いココアの香りは、なにかを少しでも埋めてくれるものになればいいな。

この青いマフラーと彼の温もりも。

Ｅｐ２４．「フクロウ」

「巧くん、この本はこの棚で良いの？」

分厚い歴史書を図書室の奥、埃だらけの本棚に半分だけ入れたまま振り向く愛（まな）ちゃん。

昨日届いた大量の新しい本を一番目立つ棚に整理していた僕は、すまない気持ちで一杯だった。

「うん、そこだよ。ごめんね、そんな所やってもらっちゃって」

「ううん、大丈夫。やっと手の怪我が治ったのにこんな重い物持ったら折れちゃうよ？」

彼女の一言に思わずぷっ、と噴き出した僕は、サポーターのやっと取れた左手をブラブラさせて笑う。

「いや、もう全然大丈夫だって！それに、そんなに弱くないよ」

口調はいつもより少し強め。でも、怒ってるわけじゃない。

それがちゃんと伝わったのか彼女は、口元に笑みをつくりながらこちらを見た。

こうやって二人で昼休みを図書室や準備室で過ごすようになって、少しずつだけれど僕は以前のようなぎこちない態度を取らないようになってきた。

季節はもう真冬、そして二学期の残りもあと少し。

窓の外を冷たい北風が吹き、葉のない木々が弱々しく揺れる。

こうやって明日も明後日も、ずっと過ごせたなら僕は幸せ者だな。
いつも、学校の何処かに探していた憧れの彼女が目の前にいて、こんな僕にあの優しい笑顔を向けてくれる。
でも、今でも思う。これは、長い夢なんじゃないか？って。
僕の頭が作り出した深い幻想の世界で、寝ても覚めても終わらない夢。
そう思ってしまう僕は、相変わらず存在していた。

「ねえ、君ちょっといい？」

独りごとにも似た言い方だった。
誰に対して放ったのか、一瞬考えさせられてしまうような、打ち捨てた問い。
本来、誰かに向けられる言葉だけあってそれだけ僕は、その声の主に対しての反応に乏しかったらしい。
その声は、一層強く張りあげられた。

「ねえ！ちょっといいっ？」

「はいっ！？」

間の抜けた僕の声と後ろから思い切り掴まれたように振り向く愛ちゃん。
僕らが視線を向けた先、出入り口に立ついかにも今時と言った感じのイケイケなお姉さんが嫌気を全面に出した顔で立っていた。
今時と言っても、愛ちゃんや三上さんのような感じとは違って、綺麗に染められクルクル巻かれた茶色い髪に顔のパーツを強調させた化粧。

そして、もはや校則を清々しい程に無視したスカート丈。
胸元の開かれたシャツからキラキラと派手なネックレスが揺れる。
その下には……

「あの先輩、なにかご用ですか？」

なぜか　先輩　と見抜いた愛ちゃんに慌てて視線を向けた僕は、あぁと頷いた。
首をコクリと揺らしたお姉さん、いや先輩は口を尖らせた。

「いや、あんたじゃなくて。あたしが用あんのはこっち」

原色に近い色で彩られた爪先をこっちへ向ける。
愛ちゃんからみたら、きっとその先に間抜けな顔を浮かべた僕がいるに違いない。

「僕、ですか？」

先輩は、小さな顎をコクコクと縦に振る。

「なんですか？」

はたして、僕はこの人になにかしただろうか？
この図書委員会にこんな先輩はいなかったし、部活に属していない自分に思い当たる節なんてない。
もしかして、学校の外で無意識に会っていたんだろうか？そうだとしても、すれ違った程度だろう……

ごちゃごちゃと頭の中を整理していた僕に、先輩は構う事なく続ける。

「今日の放課後、屋上に来きて。もし、来なかったら……わかるよね？」

上目遣いに僕を見上げた先輩は僕の返事を待つことなく、そそくさと廊下に消えて行った。

「巧くん、今の人だれ？」

「だれ、と聞かれても……」

心あたりのない、突然現れたイケイケな先輩。

そして、問答無用で取りつけられた約束。

「どうなってんだろ……」

僕らは、フクロウのように首を傾げ合った。

ＥＰ２５．「世界のドア」

放課後、僕は屋上に向かう為渡り廊下を歩いていた。
教室のあるＡ棟には屋上へ続く階段がなく、渡り廊下を挟んだＢ棟の階段を使わないといけない。
この校舎を設計した人が何故こんな構造にしたのか、以前そう問われていた先生でさえもわからないらしい。

「で、ホントに心当たりないんだな？」
「もう、涼！なんで、そんなに巧くんのこと疑うのよ？っ」

僕の隣を並んで歩く二人、愛ちゃんと三上さん。
そう、あれはつい先ほど。ホームルームの終わった後すぐだった。

「さっ、行こう？巧くん！」
「園崎、お前がなにしたのか、しっかり見届けてやる」

僕の前に立ちふさがった二人。

あ、逃げられないんだ。

僕は、瞬間的に悟っていた。

「まぁまぁ、二人とも。でも、本当に行かなきゃ駄目かな？」

あったりまえだろ！と、揃って僕を睨む。
俯きため息しか出てこない。
問題を起こしたくない、それが僕の切実な願いだった。

……と、言ってももう起きてるとしたって過言じゃないのかも。

「でもさ、会ったこともないのにいきなりケンカ売る奴もいないよな。てか、相手女か」

「わかんないよ。後ろにゴツゴツの男の人いるかもしれないし」

えぇ……

「でも、ここ学校だぞ。部外者は入ってこれないだろ？」

「あ、それもそうだね。もしかして、恐喝とか！？」

もう勘弁して……

「それはあるかもな。やっぱ尚更、あたし達付いて行ってやらないと」

「うん。安心して巧くん！もしもの時は、すぐ先生呼んでくるからね！」

あぁ、もう終わった……

「うん……ありがとね、二人とも」

えへへ、と嬉しそうに微笑む愛ちゃんと、なぜかワクワクしている三上さん。

たとえ、誰であろうと女の子に呼ばれた先に女の子を連れて行くなんて、良いことじゃない。

でも、もうこの二人はどうやっても止められないだろうな。

この先に待ち受ける不安とどうしようもない罪悪感。

僕の描いた高校生活は、いろんな意味で崩れつつあった。

「でもさ、もしかしたらそいつ、意外と知ってるやつかもよ？」
「え？でも、あの人に全然思い当たるとこないよ。それに、正直言って苦手なんだ。ああいう　感じ　の人って」

そうなんだ。僕は、あの手の人が苦手なんだ。
嫌いなわけじゃない。ただ、純粋に苦手なんだ。
例えるなら、住む世界が違うんだと思う。
派手できらびやかな世界に住んでる人達にとって僕は、異人。

いつでも、なにをするにも一歩引いてきた僕は、きっと快く思われないんだろう。
結局、どんな風な人達からしたって僕は、異端者。
どこにも馴染めない。八方美人を気取ってるだけ……
得意な　感じ　の人なんて実際、いないのかもしれない。

でも、なんでかこの二人は違うような気がしてる。
素直に笑えて話すことができて、そして愛ちゃんに惹かれてる。
それに三上さんとは、不思議と会話に困らないし。

浮かれてるのかな？

きっと、良いことばかり最近多すぎるんだ。でも、今のこの幸せを大事にしようと思える。
短い間でもいい。僕が本当の僕でいられるこの人達、この時間を……

「そんなの見りゃわかるよな、愛？」
「え？さ、さぁ？」

軽く流した愛ちゃんは、気まずそうに笑った。

こらが最後の一段。
目の前にあるスチール製の扉。この先から　なにか　が始まるのかな。
ノブを握るのに戸惑っていた僕にささやくように三上さんが言った。

「いるんだよ。思わぬ所から自分を見てる他人(やつ)って」
「え、それってかづぐわぁん……」

愛ちゃんがなにか言おうとしさのをすかさず手で塞ぎ、三上さんは薄い笑みを浮かべた。

「ほら、行くぞ？」

頷いた僕は、ノブに手を伸ばす。
ドアは、思っていた以上に軽々と開いた。

EP26.「一期一会と彼女」

ひんやりと冷たいドアノブ
僕は、それをゆっくりと回しその向こうへ踏み込んだ。
身を裂くようなほど強く冷たい北風、僕らの髪とブレザーがなびいた。
「ったく、遅い。寒くて凍えそう……」
背の丈くらいはある緑色のフェンスを背に先輩はゆっくりと振り返る。
その目の先に伸びる影の数が多いことに気付くと先輩はホコリの付いたフェンスに構うことなく、ドサッと寄り掛かってこっちを睨みつけた。
ちらちらと愛ちゃんと三上さんを見たのがわかる。たぶん本人たちも。
「へぇ、モテ男は大変みたいね。」
その一言は吹きつける風よりも冷たく冷え切っていて僕は、背中に嫌な感覚を覚える。
「いや、これはその……」
口ごもった僕をさえぎって、三上さんがいつもと変わらない口調で

向き合った。

「こいつが先輩になにか卑しいことをしないか、見張りに来ただけです。」

えぇ……それ、ホントだったんだ。

乾いた唇がパリッと音をたてて切れた。

「ふぅん。じゃ、そっちの子は？お昼にもあったけど。」

あ、と愛ちゃんは硬直すると二度三度大きく瞬きをした。

「わ、わたしここの掃除当番なんです！」

え？

三人の視線が集中する。

それに耐えかねたのか、彼女は苦笑いを浮かべると無理やりな笑い声を発した。

「へえ。なら早くお掃除した方がいいんじゃない？」

「あ、はい。」

先輩の威圧に押されたのか、愛ちゃんは端に置かれた掃除具入れに力無く歩み寄る。

「ほら、見張りの子もこんなに近くで見張らなくたって良いでしょ？園崎君がなにかしようとするなら、思いっきり叫んでやるから大丈夫よ。」

無言で頷いた三上さんは、愛ちゃんの方へ歩み進む。

「ふぅ、これでやっと邪魔がいなくなった。それにしても、君も相変わらずね。」

「そ、そうですか。あははは……」

て、どういうことだ！？

顔が酷く強張っているのが自分でもわかる。

そんな僕の表情をまるで楽しむかのように、先輩は嬉しそうに笑う。

「そんな顔してくれるなんて、こんなになるまで頑張ったかいがあるってことね。」

「あの、前にどこかで？」

風で乱れた前髪を手で器用に直し、悪戯じみた笑みを浮かべると先輩は妙に懐かしみのある口調ではぐらかす。

茶色がかった瞳が揺れ、黒く強調された瞼が閉じる。

そのどこか幼げな、寝顔にも似た表情が僕の記憶を激しく揺さぶる。

この人を知っている。

頭のどこかにそうささやく自分がいた。

Ｅｐ２６．「一期一会と彼女」（後書き）

ぎたえん☆「一期一会と彼女」は、この２６話で一旦終わりですっ

この続きは
ぎたえん☆２で！笑

まずは、巧の中学時に起きたある事から始めたいと思います∀、

先輩と巧は、一体どんな関係なのか！

そして、巧がなぜ一歩引いた行動をとるようになったのか？

ご期待くださいっ笑

でわでわ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1772l/

ぎたえん☆　「一期一会と彼女」

2010年10月10日05時20分発行